

グローバル人材育成における英語ディベート実践の重要性に関する考察

著者	三上 貴教
学位名	博士(英語学)
学位授与機関	名古屋学院大学 大学院
学位授与年度	2017
学位授与番号	33912甲第10号
URL	http://doi.org/10.15012/00001086

氏名	三上 貴教
学位の種類	博士(英語学)
学位記番号	甲第10号
学位授与年月日	2018年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)
学位論文題目	グローバル人材育成における英語ディベート実践の重要性に関する考察
論文審査委員	委員 教授 柳 善和 委員 教授 城 哲哉 外部審査委員 深澤 清治 外部審査委員 築道 和明

審査結果の要旨

論文の概要

三上貴教氏の論文は、「グローバル人材育成における英語ディベート実践の重要性に関する考察」と題して、現在の社会の中でグローバル人材育成がどのように議論されているかを概観し、ディベートの役割や意義について論じて、さらに大学英语教育の枠組みの中でディベートを導入した実践がどのように進められ、どの程度の成果が得られたかを示している。論文は10章から構成されるが、最初の7章を第1部「グローバル人材と英語ディベートをめぐる概念的な議論」とし、8章からを第2部「アクション・リサーチとしての英語ディベート実践」としている。

第1部「グローバル人材育成における英語ディベート実践の重要性に関する考察」では、第1章「国会審議のなかの英語教育」、第2章「大学が目指すグローバル人材育成—スーパーグローバル大学を素材にして」、第3章「グローバル人材育成の定義」、第4章「ディベートとプラグマティズム」、第5章「国際政治学科における英語教育」、第6章「国際社会における基盤的競争力」、第7章「『使える』から『使う』へのパラダイムシフト」の以上7章で、本論文の論題と含まれる「グローバル人材育成」に関わる現在の社会における議論を概観・分析して、それを踏まえて「ディベートの果たす役割」「ディベートを英語教育に取り入れる意義」を論じている。

第2部「アクション・リサーチとしての英語ディベート実践」では、第8章「ディベートという教育活動の特色」で、三上氏が実際に2012年度と2015年度に実践した、国際政治学科の学生を対象にしたディベートを導入した英語授業について論じている。この中で三上氏は以下の5つのリサーチクエスションを設定した。それらは、(1)英語ディベートの

授業は学習習慣を向上させたか（学習習慣）、(2)英語ディベートの授業は学習に取り組む積極的姿勢を高めたか（学習姿勢）、(3)英語ディベートの授業は、シティズンシップの素養を高めたか（シティズンシップ）、(4)英語ディベートの授業は、アカウントビリティに必要な能力を高めたか（アカウントビリティ）、(5)英語ディベートの授業は、英語運用能力に対する自己評価を高めたか、である。これらの 5 つのリサーチクエスチョンについて、さらに以下の 10 項目の仮説を立てて、英語ディベートの授業の効果を検証した。①ディベート授業受講者の前後の学習時間は講義科目受講者のそれとの間に差がある、②ディベート授業受講者は「問題を考える力、解決する力がついた」とする認識が講義科目受講者のそれとの間に差がある、③ディベートの授業受講者は「他の学生たちと学びあう力がついた」とする認識が講義科目受講者のそれとの間に差がある、④ディベート授業受講者は「図書館やインターネットなどを利用した情報収集力がついた」とする認識が講義科目受講者のそれとの間に差がある、⑤ディベート授業受講者は「国際的な事柄への関心が高まった」とする認識が講義科目受講者のそれとの間に差がある、⑥ディベート授業受講者は「これまで以上にニュースに関心を持つようになった」とする認識が講義科目受講者のそれとの間に差がある、⑦ディベート授業受講者は「選挙の時には投票に行く」とする認識が講義科目受講者のそれとの間に差がある、⑧ディベート授業受講者は「これまで以上に政治的争点に関心を持つようになった」とする認識が講義科目受講者のそれとの間に差がある、⑨英語ディベート授業受講者は「これまで以上に理由をつけて自分の意見を言えるようになった」とする認識が講義科目受講者のそれとの間に差がある、⑩英語ディベート授業受講者はこれまで以上に受講の前後で英語運用能力に対する自己評価に差がある。

この結果として、①、③、⑥、⑦、⑨、⑩において有意差が見られた。①の結果から、(1)英語ディベートの授業は学習習慣を向上させたか（学習習慣）について、英語ディベートへの参加によって、学習時間が増大する傾向が見られた。③の結果から、(2)英語ディベートの授業は学習に取り組む積極的姿勢を高めたか（学習姿勢）について、他の学生と協力する姿勢を見出すことができ、授業ディベートがこれを高めることが認識された。⑥と⑦の結果から、(3)英語ディベートの授業は、シティズンシップの素養を高めたか（シティズンシップ）について、授業ディベートは講義科目と比較して、シティズンシップを高めることに一定の効果があることが見出せた。⑨の結果から、(4)英語ディベートの授業は、アカウントビリティに必要な能力を高めたか（アカウントビリティ）について、授業ディベートが理由をつけて意見を言う力を高めたとと言える。⑩の結果は、(5)英語ディベートの授業は、英語運用能力に対する自己評価を高めたか、について、授業ディベートに参加した学生は、英語運用能力を高めたと考えていることが確認できた。

第 9 章では、さらに、学生が授業で実際に書いた英文を分析することによって、2013 年度に開講した授業で、第 1 回目と第 15 回目の授業において、社会問題に対する英語で論述する力の差を検証し、社会問題に関する認識が高まったこと、英語ディベートにおけるスピーチ時間が延びたことを示した。また 2015 年度に開講した授業では、同様に、ディベ

ト授業受講者の社会問題に対する英語の語彙数が伸びたことを示した。

結論として、グローバル人材育成に必要なアカウンタビリティ、シティズンシップ、英語能力を獲得し、山積する地球的な課題に対して、積極的に取り組む資質と力量を大学教育の場で鍛錬するために、英語ディベートを取り入れた授業は貢献できるとしている。

論文の評価

第1に、「論文の概要」冒頭で述べたように、三上貴教氏の論文は、グローバル人材育成と英語ディベート実践の重要性について、国際政治学的手法を用いながら幅広い観点から論じている。従来の英語教育学・応用言語学の研究上の視点の加えて、国際政治学の新たな視点を加えることで、この分野の研究の幅を広げることが期待できる。

このことは、本論文の第1章の国会審議の中で「グローバル人材教育」がどのように論じられてきたかの分析、第2章のスーパーグローバル大学に選出された大学の学長による入学式式辞の分析によく現れている。

第2に、ディベートを導入した授業の目的に関して、英語能力向上以外の目的について、アカウンタビリティ、クリティカルシンキングといった、ものの見方(第3章)や、プラグマティズムの可謬主義に依拠した考え方(第4章)が詳細に論じられている点も併せて評価できる。

第3に、実際のディベートを導入した授業の実際を詳細に示し、その評価を受講している学生に自己変容の姿を質問紙調査で検証していることも(第8章)、英語教育実践の観点から貴重なデータであり、また「特定の目的のために英語(English for Specific Purposes(ESP))」の1つとしての「国際政治学の英語」を扱った事例も同様に貴重である。

第4に、論文全体として、「グローバル人材育成」という視点を幅広く考察し、そこでの議論から最終的に英語ディベートの授業における効果を抽出できたことは、やや全体の繋がりが弱い点もあるが、授業実践の研究としては価値のあるものであり、今後研究の基礎となるものと言える。

一方で、今後の課題として、この論文では全体として目指そうとした枠組みは意欲的なものであるが、第1部で概観した内容と第2部で扱った英語ディベート授業の内容、効果などについて一部に繋がりが明確に見えない部分も見られる。実践研究において、その効果を的確に捉えることは研究手法としてしばしば困難を伴うものであるが、この論文で得られた結果を基にして、さらに精緻な研究の枠組みを構築することが望まれる。

以上の点を総合的に考慮して、審査委員会は三上貴教氏によって書かれた本論文に対して博士号を授与することが適当であると判断した。